

パネルディスカッションP2-3 間歇型一酸化炭素中毒発生時の問題点

土居 浩 山川功太 徳永 仁 望月由武人
中村精紀 吉田陽一

東京都保健医療公社荏原病院脳神経外科

【目的】今回当施設が経験し、詳細な分析がなされた間歇型一酸化炭素中毒症例23例の分析を行い、各種問題点が浮き彫りにされ、それぞれに対し検討を行った。

【対象】1995年1月から2011年8月までに治療した一酸化炭素中毒患者153例のうちの経過から間歇型一酸化炭素中毒と診断され、詳細なデータを得られた23例を対象とした。

【結果】対象例23例は全例発症急性期の治療は他院であった。年齢は28歳から78歳(平均51.5歳)、男性17例、女性6例と男性優位であった。原因は練炭自殺14例、排気ガス自殺1例、木炭などの事故6例、不明1例であった。初期治療医療機関は6例が2次救急医療機関、12例が3次救命救急センター、2例が中国、シンガポールの救急センターであった。その他3例は初期治療が行われなかった。一方で近隣の3次救命救急センターでHBOを初期治療で行っているところからの間歇型発症例の紹介はなかった。予後に関しては23例中2例が死亡。9例が寝たきり状態。12例が独歩可能となり、うち5例は社会復帰可能となった。入院期間に関しては、HBO回数が全例20回以上で平均3ヶ月を要した。もっとも問題となるのは寝たきりの症例で療養型病院への転院に困難を来とし、年齢や精神疾患を持った症例に関しては選定に長期を要した。また今回の検討の中で初期治療期間への報告がなされてはいるが、当院到達までに数カ所の医療機関を介して来院したため、急性期医療機関が知らない症例も存在した。

【考案】当院の症例の多さは、東京都精神科救急医療の制度が関連しており、ひまわりという制度の下、急性の精神症状の場合、都立の4病院に搬送されることが多く、都立墨東病院、都立松沢病院、東京都保健医療公社豊島病院、東京都立多摩総合医療センターの精神科に搬送される。そこからMRIおよび臨

床症状、経過から当院に搬送されることがほとんどであった。さらに神奈川県や埼玉県の精神科病院からの転送が多かった。このことから精神科での理解が進んできていることが想像される。しかし神経内科からの症例もあり、大脳白質であれば精神症状であるが、中脳黒質が病巣であればパーキンソン症状である症例もあり、各科の理解が必要であることは言うまでもない。また治療面ではパルス療法併用始めてから予後良好の症例も増加して、間歇型一酸化炭素中毒自体治療の可能性があることがはっきりしてきた。ここでHBOの間歇型一酸化炭素中毒に対する治療効果は、病態自体に効果があるのか、白質病変の浮腫性の病変に効果があるのかは断定できなかったが、効果はあったと考えている。今後は治療パターンにおけるHBOの意義の検討が必要と思われた。

【結論】今回間歇型発症の面から検討を行ったが、救急治療後のフォローがなされていないことが、もっとも重要と思われた。このため救急医への間歇型発症の報告を行いながら、啓蒙も必要と思われた。また今後は画像診断も重要ではあるが、あくまでも臨床症状が重要であることが今回の検討で再確認された。